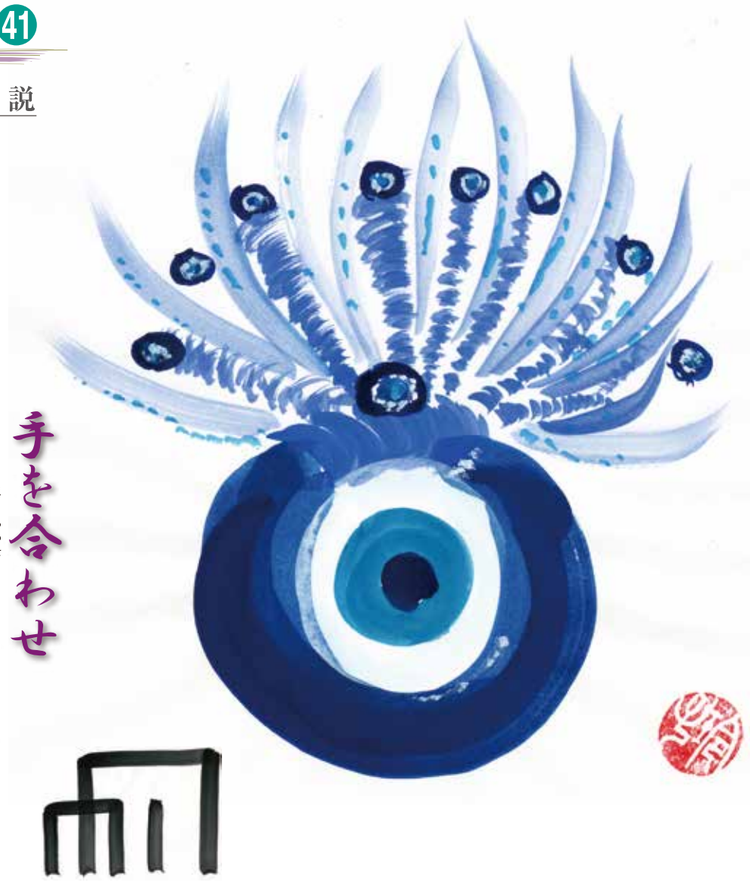
●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 41

41st Letter

一番観音伝説

伝説そぞろ歩き



三十三観音めぐりの出発点
国道沿いに建つジャンボ観音

国道1号線の一番交差点のすぐ東側の、道路沿いにジャンボ観音が建っています。これが、熱田新田番割観音の一番観音。通称「身代わり地蔵尊」です。高さ6m、胴回り5mもあるコンクリート像。丸顔で子供のような無垢な表情が印象的な地蔵です。

堀川西から庄内川までの一帯は、かつて熱田新田といわれていました。江戸時代の初めに、尾張藩主・徳川義直の命令で開拓された新田で、全体を33に割って、その一つひとつの地区に、新田の守護神として観音様が祀られていて、その一番札所が一番観音です。

戦前まではこの周辺は新田が多く残っていましたが、戦後、都市化が進んで静かな住宅地となっていますが、この番割観音の信仰は、現在も残っています。

身代わり地蔵尊が登場したのは、昭和54年(1979年)春。一番出身の元大工さんが新田を開拓した先祖の供養と、すぐ前を通る国道1号線の安全を願って約2年がかりで手作りした力作です。

確かに、国道1号線は交通量が多く、交通事故も多発しています。そこで、事故で亡くなった犠牲者の冥福と、みんなが事故に遭わないよう地蔵に身代わりになってもらおうという願いが込められているのです。垢抜けしていないところがかえって地蔵さんらしく親しみが持てると拝観者からもなかなかの好評のようです。

なお、毎月第3日曜は観音めぐりの日で、信徒たちが一番観音から下之一色の三十三番観音まで9時間かけて歩いて巡礼するといいます。

生まれてすぐ旅に出たヘルメス
ウィンウィン関係を築く達人

ギリシャ神話で交通や商売の神といえば、ヘルメスです。父は全能の神・ゼウス、母はアトラスの娘・マイアで、二人はアルカディア地方のキュレネ山中の洞窟で結ばれ、ヘルメスが誕生します。ヘルメスは生まれたその日に洞窟の中で亀を捕まえ、甲羅を剥がして、穴を開けて7本の糸を張って竪琴を作りました。

そしてすぐ、長い旅に出ます。やがてオリュンポス山の麓・テッサリアに到着し、いたずら好きのヘルメスは、アポロンが所有する広い牛舎からこっそり牝牛を盗み出すことを思いつき、見事成功します。

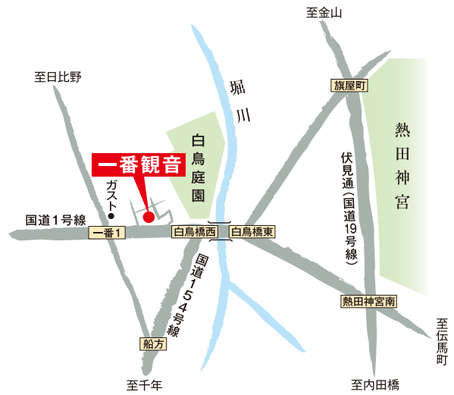
ヘルメスの仕業だと知ったアポロンから問いつめられますが、ヘルメスは「生まれたばかりの赤ん坊の私にそんなことができるはずがない」ととぼけます。納得がいかないアポロンは詰め寄ります。

そこでヘルメスは一計を案じ、発明したばかりの竪琴を取り出し演奏します。アポロンはすっかり感心して竪琴を欲しがったので、牛泥棒の件を不問に伏す代わりに竪琴をプレゼントします。実は、この竪琴がアポロンの黄金の竪琴になったのです。

▲ 通称「身代わり地蔵尊」で知られる高さ6mの一番観音。

こうして、ヘルメスはアポロンと仲直りして、その証としてアポロンから魔法の杖をもらいます。こうしてヘルメスとアポロンは、オリュンポスの神々の中でも特別に仲良しの間柄になったのです。ヘルメスがアポロンからもらった杖には「あらわるものを眠らせてしまう力」がありました。

このように、ヘルメスは生まれてすぐ長い旅をして、アポロンとお互いの利益になるウィンウィン関係を築いたため、「旅の神」「商売の神」と呼ばれるようになりました。ヘルメスを見習ってウィンウィン関係を築けるようにアレコレ知恵を絞ることは、賢く生きていくための処世術なのかもしれません。



※次回は、家康幽閉伝説を特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus